



与謝野町の自然・文化について



林 千晶

株式会社ロフトワーク (YOSANO OPEN TEXTILE PROJECT パートナー) 共同創業者 / 代表取締役

はやし・ちあき / 2000年にロフトワークを起業。グローバルに展開するデジタルものづくりカフェ「FabCafe」など、年間500件を超えるプロジェクトを多岐に展開する。



「与謝野町産のホップが採れました!」。そんな言葉が目飛び込んできたのは、2015年夏のこと。ホップ栽培のほかにも、丹後ちりめんの活用、多様な視点でフラットに町の未来を考える「与謝野ラウンドテーブル」など、与謝野町の新しい取組みは多岐に渡りますが、その核にあるのは、経済効率を優先する中で失われてきた、「作る」「育てる」「伝える」といった人間の基本的な営みを再発見するプロセスなのではないでしょうか。

常識を変える挑戦は、いつも辺境から起こるそうです。東京のような「中心」ではない与謝野町だからこそ、地球規模の挑戦が生まれ、日本中、世界中にインスピレーションを与えていく。そんな様子が、もう見えていますね。



宇多 喜代子

俳人 / 現代俳句協会名誉顧問

椿サミット与謝野大会記念俳句大会選者

うだ・きよこ / 俳句の実作を中心に、俳句の周辺ともいえる古今の暮らし(衣食住)について考察する。現代俳句協会賞ほか多数受賞。2002年に紫綬褒章を受章。



「丹後」も「与謝」も地名そのものがブランドです。どちらにも古めかしい印象がありますが、私たち俳人はこの古めかしさと、そこから生まれる新しさが大好き。与謝野町はなんといっても蕪村にゆかりのある地ですし、江山文庫もある。惹かれるところが山とあります。

そんな魅力を活かして、例えば町主導で「吟行セット」を始めるのはいかがでしょう。吟行とは、詩歌を歌いながら歩いたり、詩歌の題材を求めて名所や旧跡に出掛けることをいいます。小型バスで町のスポットをめぐり、お勉強タイムを入れたり、おいしいものを頂いたりして句会をする。与謝野再発見が楽しめそうです。



OE MOUNTAINS

大江山連峰

標高 832m の千丈ヶ嶽を主峰として、西に赤石ヶ岳、北東に鳩ヶ峰、銅塚、大笠と連峰をなす大江山。その複雑な山並みから、樹種が豊かに生成し、植物の宝庫と呼ばれ、連峰全体で 28 科 80 種の生息記録をもつ、府内屈指の探鳥地でもあります。11 月から 12 月にかけて、前夜との寒暖差が大きくなった朝に現れる雲海は息をのむほどの美しさです。



NODA RIVER

野田川

大江山山系を水源とし、阿蘇海へと流れる野田川。長い間、収穫した穀物を川舟で運ぶための“道”であり、加悦谷地域では大正末期まで流通手段の中心として重宝されてきました。現在、そのように使われることはなくなりましたが、農・工業用水として利用され、町の生活を支える存在に変わりありません。秋には、産卵で遡上する鮭の姿を見ることができます。



ASO SEA

阿蘇海

阿蘇海は、目の前にのぞむ天橋立とともに、古くから詩歌に詠まれてきた景勝地のひとつ。波が立つことはほとんどなく、海水の出入りも少ないため、生き物のエサとなるプランクトンが豊富です。名産は脂がのり、まん丸と太ったお腹が特徴の金樽いわし。阿蘇海で獲れるマイワシは特別にそう呼ばれ、高級魚として取引されています。



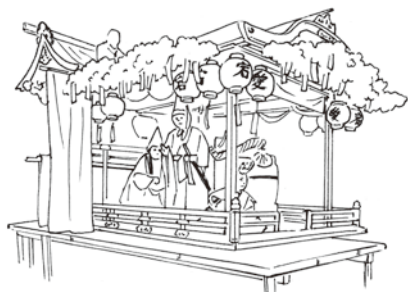


受け継ぎ、伝える文化と芸能

町を盛りあげる祭

加悦谷祭、岩滝祭、三河内曳山祭が行われる毎年4月下旬から5月初旬にかけて、町全体が活気に満ち、賑やかな時期を迎えます。各例祭では、神輿や屋台の巡行、神楽舞の奉納に加え、子供歌舞伎など多彩な行事が行われます。また、10年に1度の開催ながら、岩滝大名行列も欠かすことのできない祭のひとつです。

震災や戦争、継承者の人材不足が深刻化するなどの危機を乗り越え、現在まで続いてきた伝統行事は、町が誇るべき財産です。



加悦谷祭 4月最終土・日曜日

神楽舞や太刀振りの他、後野宮本町で若い男衆たちが中心となり復活させた「愛宕山子供歌舞伎」は見どころのひとつ。クライマックスには、天満神社の長く急な階段で、神輿を担ぎ上げるなど見どころの多い祭です。

岩滝祭 5月1日

その源流が、文政年間（1820年頃）に旧岩滝村に伝えられたとされている岩滝祭。町の無形民俗文化財に指定されている岩滝神楽をはじめ、太刀振り、笹ばやしなどが奉納され、神輿が町を練り歩きます。



三河内曳山祭 5月3日・4日

倭文神社の春季例祭として開催される三河内曳山祭は、「丹後の祇園祭」とも呼ばれる華やかさが特徴です。「ヤーマ、ヤーマ、コーリヤ、コーリヤ」の囃子に合わせて山車、屋台の12基が町を巡行し、境内で神楽舞を奉納します。



岩滝大名行列

もとは天保6年（1835年）に始まったとされる大名行列は、平成3年以降、10年に一度のペースで開催されています。江戸時代の参勤交代を忠実に再現した500mにも及ぶ行列を見ると、まるで当時にタイムスリップしたかのような感覚を味わえます。



文人との深いゆかり

俳句や短歌が息づく町

与謝野町は、与謝蕪村、与謝野鉄幹、晶子ら、日本を代表する文人たちに愛されてきました。この町で生まれ暮らした者、縁を尊び訪れた者など、関わり方はそれぞれでしたが、海、川、山といった雄大な自然に自らの心象を重ねた点は共通しています。

平成6年には丹後を訪れた文人たちが培ってきた文化の振興を目指し、短歌と俳句の資料館「江山文庫」が開館しました。町内各所には句碑や歌碑も多く残っています。



与謝蕪村

(1716-1783年)

俳句と絵画の両面で活躍。宝暦4年(1754年)から3年間宮津に滞在した。与謝野町を舞台として、「丹波の加悦といふ所にて」の前書きで名句「夏河を越すうれしさよ手に草履」を残す。町内の施薬寺には蕪村作の屏風が保存されている。



与謝野礼厳

(1823-1898年)

歌人・僧侶。与謝野鉄幹の父。現在の与謝野町字温江に生まれ、幕末は勤皇活動に従事、維新後は各種事業に携わった。各地を奔走し、しばらくぶりに帰郷した明治25年春には「見も聞きも涙ぐまれて帰るにも心ぞ残る 与謝のふるさと」を詠んだ。



与謝野鉄幹

(1873-1935年)

短歌革新を唱え、明治30年代の日本浪漫主義連動を主導。昭和6年11月には、父・礼厳の生地であるこの町を訪れ、「飛ぶ雲に秋の日ひかりそのもとに 大江の山のもれるうすべに」と、大江山の秋の美しさを歌った。



与謝野晶子

(1878-1942年)

『みだれ髪』刊行とともに明治の歌壇に一大センセーションを巻き起こす。昭和5年に夫の鉄幹とともに大内峠を訪れて詠んだ「海山の青きが中に螺鈿おく峠の裾の岩瀧の町」は、夕暮れの大内峠から眺める麓の街灯りを美しい比喻で表現した作品。